詩諧

蘆面己集

巻之四

和漢發句

春　泉

秋　冬

職人

跋

特別
へ5
6053
5

物見茶筅買ふ光　貞徳

春くれ教

五つ子の帰や怪さん寄りて寝　真珠庵　如泉

浪人の時うつ[illegible]　紫藤軒　言水

[illegible]　松の根　招鳩軒　才山

光り前を毒うち者見のくやさ式

領巾や香となりて[illegible]の梅　春理齋　才磨

56-4137

[illegible]て注[illegible]も[illegible]毒乃花　金竜寺 櫻叟
[illegible]ちるこうら梅の[illegible]　尾陽 荷兮
[illegible]言う梨[illegible]毒よ[illegible]雪　竹亭
若葉橋とうとうやとのぬき　勢州山田 又玄
[illegible]やこの[illegible]　櫻塚 西吟
[illegible]八東夷乃[illegible]　行安
[illegible]雨[illegible]牛[illegible]　方山

[illegible]ハ[illegible]あひとうの[illegible]　誹諧堂 湖春
[illegible]て[illegible]やしうの[illegible]　八山
[illegible]の[illegible]　岸松
[illegible]や[illegible]　尾陽 越人
[illegible]の[illegible]　才磨
[illegible]の[illegible]　一葉軒

有の部を拾テ

青柳を毎日風の吹くこと可南　求之

風なうら衣よはなを柳うる　尼　五樹

愼勿模愚似故父耶

人ぬすまるうら衣とのうぬぎ　竹亭

三所の紙位うらもひしよ

と清まてきてこそいきしく

梅ゆわらと梅よわらと笑本哉　方山

拘のかわえよも跡さ　三月　可休

縄掛よりくさ帰ぬ雲まて　心兮

吉ちゆ古の扇懐紙

第三まてと写し

為のはうゆ雨かいの　山梅　潮春

とりさ跡隔の柳ゆ花　言水

町ちくゆ東ゆ雲の月清て　如泉

物おりゆ新ちゆ花ゆ離れ　可迴

花の陰ゆ清ゆ

調ちくさは

春休し弱の捨猫花凡凄（コヒ）　素門　身軽

[illegible]の花の骨[illegible]　方山
[illegible]　李佗
咲ぬ木を恨[illegible]　山樹　脱山
いつもん[illegible]屋舗のお樹　李門　和及
[illegible]　山樹　李逍
[illegible]　山樹　龜林
[illegible]　山樹　可休

夏之部

[illegible]の木の花[illegible]　立甫
[illegible]　賀泉
[illegible]　竹夢
[illegible]　和及
芍藥や庭の[illegible]　鞭石
夏の月柳[illegible]　松逍

第三ままく写し侍て

釣初て投屋たりしろさ侍ける　言水

茶と清水清月の前し清冥　加泉

寒うしろ姐お撫と哀れ鶯ちて　潮春

竜田寺よりうさぎを乞て

投書火を門に焚らるる　方山

海山去れ古ふて

麦畑に小禽の鹿子ほしさ　加泉

拾ひ捨て月の邑の寄る船　真珠庵

呼鳥や投屋に入て海月　松木

廣く寝く夢をもとめる旅枕　琴山

ちりかや投に送る酒の酔　荷翠

糸とて柳の蔵つとうまる　可休

何人か誹友とゝしる

門前の額の書は磐ちて

腹立の弱りて記　投懐書　紅色

猪牛

我菴を長柄の首浦ちかき利　櫻塚　西吟

ふしかやうとまつ初を家とうと　大坂　來山

中よりとうと忘仏も唱ス四季うれ　鉄硯

短夜やうとうとはたと寝ル　大坂　万海

蓮葉や人の深ひとれまと
泥乳とて花の科よりひらて

世を見て梅の氣まなへ口を開　大坂　來山

石行や淮花ちは海と捨きらん　遊君　うう

蓮葉に口惜き花の新　可通

日盛の岩ちとこほる清水哉　繁田　常牧

涼しさ人も同じ清の武　雲竜堂
無の部とうとて

汲ちけて青こ新る清ちうる　可通

乘物のなくても清き蓮哉　仝

蓮の盛去年の場主の酒こう　滝水軒

鬼百合等を陸の花のちさうれ　不及

雪ハ消て氷の花ひらく船　言水

吉野の人まつしてとまて神唱ふ門原　可休

美好と盞に厳る戴紙

係さは四するわまる乳頭の船　如泉

伏人有南の絆さて

雲風と伏人の海と係む　方山

大坂万海眞もり

係さやなうまとあり鶏時橋　我黒

ちこまて係やみの新生師　東禁其諺

安かの小歌祢ふ中乳夏野哉　仝

儀奇の表第三ふて

係行中る笛持ツ尾とう船　可休

志免うとまて免白雨の石　如泉

阿見立とのう鶏のひまく　信德

カタニ

秋うく歌

末まで花の樹の立枝や梅櫻（モトキ）　惟舟

桐の葉やたゞひとつはうきうき　可休

七月朔日一華咲て

虫の花の形さうなる哉　和南華

月ゆゑもやそよや銀河の白ゝ　才麿

かくて年いくつ過ぬる星の中　鞭石

のちさの樹かしけるあつさ　竹亭

七夕を今宵はかりさしかはす　周也

泣とは清笛ひもとき舞二ツ星　風山

何やらの集は月の
履屋やとこわれて隠て

月ふまえて星の履屋哉　桂芳　郊泉

世をうて美の骨擬のこそはまを　方山

宋女なる人の嘆と養に来て　郊泉

聖昊の巷の香うはとは如郭花　才磨

菊城の雛やは舞こそ　心兮

日代記無屋うとうとう式
妓義して

鬼の爲の先ッ朝前の塔よ梁　素門　和及

秋八の船は海の花火うの船　杜木

打ちうちうちんの乳あてなし鉄の蛇　可休

桜海やとかの海の花わうと　櫻更

ちうちや稲妻の間とうとうとう　鉄硯

尾張の藤よ尾張
参河の内と紙て

冴寒し富士よりふる雨は足　可遇

行春も中ほの花盛と言水

ゆくもの花盛とるて仁王門　古山

春雨ふる花麻の服　全

ふる雨の白と花卿　凡山

一面の白と波出て花卿　凡山

月ふれて稲の金あさえ　如泉

かりそめや行はつまり山の月　治郎
　花咲とふ山て

蕎て有心物也　もちろん源の月　可休

九山やおうかくまて秋は来　全
　春は國よりもくもんちろも
　ちろたきし可休そ先て
　又二りそ

小面の屋根ふる雨の花哉　心兮

冬之部

山市晴嵐繪讃

山をとり酒愛也とまし嵐風師　李吟

ふるく迄松の命をはるくもの　和及

うゝや松のもとの霞　意伯

はるゝ可見うゝ紙

伯父よりあれて

風や定りたりしも　蘊林

酒よりも風りしかみ武　臭隆

いさ酒の酔ゝや雪の雲　如泉

雅家の俳屋そ雪食よ吹風　仝

ゝゝやむうゝ雪の多

月の雪とゝひ猿ゝ食武　西吟

むひ屋遠く猫と鶏の雪　松逼

ドノ今と猫の書ゝゝや雪ゝ船　芝雪

あゝふゝゝ八女子の雪の門　如雲

有無の題詠て

流れたくはいち雪の色　舊白

あはらまうまうあてあ雪の色　我黒

たりうや我身芸なくて不二の名　可依

聽書中ハ松さと事一あれ　可廻

夜の中の雨の形ち滝形式　交也

雪庵いうりもひて出る形式　鉄硯

たるや大陸のよへ形ひ出ス　龜林

二十四孝の中
老まゝの孝と詠

次の間の人と詠ひ年まゝし　琴山

酒ゆや人ゝよりこの所老草　紅亀

めの年や千業のあ間松よ来ス　如雪

かうとの音ハ師光の真式　卞仲

あの人の日つまてその都の
情きしハ唱ひかへうと
いつもと思ふるはくふらやて
四季の都ゝの明る宝ゝ像

北野ハ梅芳野　聿侊

唐櫻茶換酒　雪蓑

山櫻無迂付　蘭齋

螢火安良殿　鞞軒

芟斬煩君盞　其諺

蓮盧山木樔　雪蓑

八月望前有士來求落髮之句因以與之

名遼圓成月　仝

松茸其土耳　如泉

僧鶏頭應黑　仝

早咲梅痩我　雪蓑

いはのけしきや有まし去やちくさの方
やうや二十四人の賦人のとそうひたちと
立てしとの業と殆しきふそ有旨象武
元とまうひさらまとまかくれて硯ひらと
其中に金花瓶三ツを主ける先結氣
打物一数組と拾ひえうひよ紙たて
免帳にて時計のてんぐきちくれ
音とうまよて立ツとお四ツとかぞへ四ツの
時間白玉四六の数に漢如其白意と
さくまたひ白玉かくとんらう帳に
三ツまう氣の象ふまこ三ツまう数
のあらしとたのてうひかへまと

花の木まのかけさを客久うの紅　醫師
わうひうま嵐震梅師走武　信陽師
氣とうのて見るるふ散ぬ蓮　俳師
提樋に蘭の礁わうしなる梨　經師
冬枝はかまの大造し松むら　綴治
数東八に虹のあくと削うの紅　商近

清さやう付し魚九水　研師
茅の穂はきうせて見る哀なり　真金吹
朝日丸とゝ人や神無月　神古
月花やむとらくの稲ひ和　盲人
名月のむぎや茶ふ土器師　土器師
無よりの白土そ塗らるし　壁塗

一時も偽りもなき時雨　染屋
茅葺の間はるる国学れ　延打
玄雨や孤堂丸乃和かくる　陸師
とかもへしまとゝう板橋の和　桂和師
光多河霞く花て舞ふ清きる　猪爽打
り舞や屋を紀鄭買御書　私人

葉ゆ家石ハ細ゆ[illegible]
沙宮の日錫引石よりうる次
雲月や毒の書こしは被ケ物
大原女ちかくのやきふの雪
紅起ハ石の裏やを若ひ多
浪ゆ春しゆ土れうほ振ぶうる武

針師
楊師
桂女
大原女
商人
泉郎

大凡人之評物也不必无舛誤
然多談不曰者愈於曰而未再
顧其所評未之也有柳困氏
者於此雖非自慢我獨醒虜不
曰則騷乎胸之語依一卷憑擧
直錯諸枉蓋爲使評家者流各

自立也視者商量云元祿之有
三庚午歲昏南斗中之日江東
以貫子滌筆於律龍裝軒

二條通寺町西エ入
本屋半兵衛開板